

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：10101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19975

研究課題名（和文）『白氏文集』古鈔本を対象とする漢字音研究

研究課題名（英文）A study of Sino-Japanese in old manuscripts of Bai Shi Wen Ji

研究代表者

鄭 門鎬（JUNG, MUNHO）

北海道大学・文学研究院・専門研究員

研究者番号：90912486

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本で人気を博した漢籍である白居易撰『白氏文集』諸本の中にある漢字音注記を調査し、漢字音注記から推察可能な様々な言語的な特徴を相互比較することにより、博士家・仏家の間に見られる差（位相差）を明らかにすることを目的とする。その結果として、『白氏文集』内の漢字音注記には学問集団による差はもちろん、個人の差があり、注釈書を伴う他の漢籍訓読資料に比して、規範性が弱いことを検証した。ただし、公表した結果は8種の資料の分析の上での結果である。他の資料については現在論考を作成中であり、本年度中に公開する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は日本語で用いられる字音読みの層位に関する史的研究である。日本漢字音は母胎音の言語的な特徴を反映して摂取され、日本語の音韻変化を受けて、現代の漢語にまで引き継がれているものである。そのうち、本研究の対象となる漢音が現代日本語の漢語で占める比率は約6割であり、その伝来と定着の過程を辿るためには、漢音を主として用いる資料（漢音資料）を用いて分析する必要がある。本研究は、中国音韻学をはじめ、日本語の音韻史に貢献するとともに、訓点資料における音読みと訓読みにおける関係性にも触れることにより訓点研究にも一助となるものである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study reveals the differences within academic group Hakase-ke and Buddhist monks through analyzing Sino-Japanese glosses in diacritic materials of "Bai Shi Wen Ji" which are Chinese literary works by Bai Juyi that gained popularity in Japan. As a result of this study, it verified that there is variability of the linguistics phenomena in Sino-Japanese by academy group, in addition by individual person. Moreover Sino-Japanese glosses in the manuscripts of "Bai Shi Wen Ji" have a lack of normativeness than any other diacritic materials of Chinese classical work with commentaries. This result is obtained by analyzing 5 manuscripts, but I will publish articles about other manuscripts this year.

研究分野：日本語学

キーワード：白氏文集 日本漢字音 漢音 訓点資料 漢籍 位相

1. 研究開始当初の背景

日本語における漢字音には呉音・漢音・唐音などの様々な層位が存在する。そのうち漢音は、主として漢籍を学習する場合に用いられていた字音の層位である。申請者は修士課程(2013年~2015年、韓国崇實大学)に上野本『注千字文』、博士課程(2017年~2020年、北海道大学)には経書類である『論語』『尚書』『孝経』といった複数の漢籍古鈔本を調査し、その中に書き込まれている漢字音注記に着目し、日本漢字音の研究を続けてきた。

申請者は2013年、2014年の2回に亘って、上野本『注千字文』と合わせて、京都国立博物館に所蔵されている神田喜一郎旧蔵本(神田本)の原本調査に立ち会う機会を得た。これをきっかけとして、日本に『白氏文集』の古鈔本が複数現存することを知り、それ以降、博士課程の間に経書類の漢字音研究を行う同時に、『白氏文集』鈔本の漢字音を題材に3回学術発表をしている。

清少納言の『枕草子』に「文は白氏文集・文選」といった文言があるように、『白氏文集』は夙に日本で人気を博した漢籍であり、様々な学習者によって加点された訓点資料が多数現存している。

漢音研究の大著である佐々木勇(2009)『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』の分類では、『白氏文集』は「漢籍訓読資料」に分類できるが、同じ「漢籍訓読資料」の内部にも様々なジャンルの典籍がある。『論語』や『尚書』といった『經典釈文』を含む複数の注釈書が学習に介在した経書類や複数の注釈書が存在する文学作品『文選』、史書『漢書』『史記』と比べて、『白氏文集』は字音ないし内容に関する中国側注釈書が存在せず、規範性が弱いと想定した。また古鈔本(訓点資料に限る)の現存点数が比較的が多く、その学習には多様な層位にいる人物が注記に関わっているため、学問集団により漢字音注記から導き出せる言語的な特徴や注記の多寡など、その傾向に差があるのではないかという疑問が生じた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、院政期から南北朝まで約300年間に書写・加点された鈔本のうち、学問集団が異なる鈔本を調査し、漢字音注記から推察可能な様々な言語的な特徴を相互比較することにより、博士家・仏家の間に見られる差(位相差)を明らかにすることを目的とする。更に、収集した『白氏文集』の漢字音データを経書類との漢字音の特徴と比較することにより、漢字音資料としての『白氏文集』の位置づけを明確にすることである。これは最終的に「漢籍訓読資料」内部にも違いが存在することを提示するためのものであり、本研究はその基礎的な作業である。

3. 研究の方法

A. 研究範囲

本研究では漢音資料である複数の『白氏文集』古鈔本の影印・写真などの入手と原本調査が必要である。申請者は博士課程から10種以上の鈔本を入手しており、研究の範囲としては奥書から博士家もしくは仏家に所属する加点者が確認できる9種類の鈔本を用いる。

博士家鈔本：神田本・時賢本・金澤文庫本

仏家鈔本：嘉禎本・正応本・永仁本・管見抄・文集抄・東洋文庫本

B. 漢字音注記のデータ入力

以上の研究資料に書き込まれている4種類の漢字音注記である、声点・仮名音注・同音字注(類音注、同音注とも)・反切注のデータを種類ごとに分類して入力し、さらに、それらを漢音の母胎音である中国中古音の規範となる現存韻書である『広韻』(1008年成立)に則って『白氏文集』の被注字(漢字音注記が施されている字)を分類する先行作業が必要である。

C. 漢字音注記の分析方法

4種類の漢字音注記は漢字音を示すための注記であることは共通するが、各注記はそれぞれ役割が異なるため、注記の種類によって異なる方法で分析を行う必要がある。

漢字音注記の分析方法としては、声点(声調ないしアクセントを示すための符号)の場合、漢音声調の特徴を基にそれらがどのように反映されているかを数値化する。仮名音注の場合は、表記の一貫性の観点で分析を行う。同音注・反切注の場合は出典となった辞書・韻書を調査し、さらに被注対象となった原因を明らかにする。

4. 研究成果

A. 論文

・鄭門鎬(2023)「院政・鎌倉時代書写加点『白氏文集』における漢字音の諸問題 博士家・仏家書写「新樂府」鈔本の比較を通じて」『訓点語と訓点資料』150, pp.86-53

本稿は、『白氏文集』資料のうち最も多くが現存する「新樂府」(巻第3・4)写本のうち、書写者が明確である博士家の加点本2種(神田本・時賢本)と僧侶による訓点本3種(永仁本・嘉禎本・正応本)を対象にして、主要な言語現象を選び出し比較を行ったものである。その結果、博

士家鈔本はそもそも漢字音注記の数が比較的少なく、声点・仮名音注の加点は難字・多音字を中心に行われていることが明らかとなった。それに比べて、仏家鈔本は逐字的な加 points の鈔本が多く、それに比例して漢字音注記の数が極めて豊富であるが、具体的な加 points の事例は加 points 者により大きな幅が見られた。声点・仮名音注以外の反切・同音字注は鈔本も、加 points が任意的にされており、これはそもそも『白氏文集』に有機的な関係性を持つ中国側注釈書が存在しなかったことに起因するものであると判断した。

B. 学術発表

・「京都大学所蔵「新楽府」鈔本の漢字音について」日本語学会 2022 年度秋季大会
京都大学所蔵の 3 種の「新楽府」鈔本を対象にして、学術研究発表を行った。3 種の鈔本は 1 種を除き、奥書を欠くため、素性が明確ではないが、上記の A. の拙稿を基に判断すると、3 種の鈔本すべて仏家鈔本に近い性格の鈔本であることを公表している。

C. 原本調査

2022 年 11 月 30 日より同年 12 月 2 日まで、斯道文庫（猿投神社蔵本、鎌倉後期から南北朝期加 points の 6 種類のマイクロフィルムでの調査）・東京都立中央図書館（近世版本）・東洋文庫（南北朝から室町初期加 points の加 points 本）・東京大学国語研究室にて『白氏文集』諸本（版本・近世写本を含む）の調査を行った。

本研究で扱う 9 種類『白氏文集』鈔本の漢字音注記はすべて入力・点検が完了しており、その他にも京都大学蔵本を含む 5 種類鈔本の漢字音注記を完了している。選抄本である管見抄・文集抄・金澤文庫本に関しては分量が多く、点検に時間を要したため、現在論文作成中である。近年訓点資料を基に漢字音のデータベースが公開されており、学術論文で公表が終わっている資料に関しては、交渉の上、インターネット上で公開する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鄭門鎬	4. 巻 150
2. 論文標題 院政・鎌倉時代書写加点『白氏文集』における漢字音の諸問題：博士家・仏家書写「新楽府」鈔本の比較を通じて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 訓点語と訓点資料	6. 最初と最後の頁 86-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鄭門鎬
2. 発表標題 京都大学所蔵「新楽府」鈔本の漢字音について
3. 学会等名 日本語学会2022年度秋季大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------